

『03・公認の関係』から、約一ヶ月後。

とある年の秋。十月下旬の日曜日、二十時ごろ。日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。天気は雨。外の気温は十度を切った。もう冬の気配が近づいている。

場所は、広末家。

主人公は今、イヴの家で、一緒にゲームをしている。

……ゲームをしている？

SE1 レトロなゲームのBGM

【最初から流す】

【フエードインする形で始まる】

【0—5秒ほどまで流してセリフ】

【その後、ごく小さな音量で流す】

【▲1でSE6と切り替わる】

SE2 敵キャラクターが逃げるSE

【最初から最後まで流す】

【淡々と落ち着いているが、かなり真剣にゲームを楽しんでいる。

クールなハンターのイメージで】

先生、そつち行つたよ。お願ひ】

〈主人公〉

「任された！」

SE3 イヴの操作するキャラクターが、主人公の操作するキャラクターに魔法をかけて
くれるSE

【最初から最後まで流す】

SE4 主人公の操作するキャラクターが、敵キャラクターを攻撃するSE

【最初から最後まで流す】

SE5 敵キャラクターが倒れるSE
【最初から最後まで流す】

この会話を聞いた人は『おそらく二人は今、最新鋭の、複雑な操作を要求するゲームを
しているのだろう。これだけイヴが真剣なのだから』と思うだろう。
だが、そうではない。二人が興じているのはレトロゲームだ。
主人公が子どもの頃に、夢中になつて遊んだ作品である。

「嬉しそうに。主人公が敵にとどめを刺したと確信して」

おつ

これは主人公が『広末さんの家で一緒に過ごす上で、何か遊べるものがないだろうか
……』と検討した結果、持ち込んだものだ。

当初は『おそらく広末さんが遊んだ事のないゲームのはずだ。この古さを、かえつて新
鮮に感じてもらえるかもしれない』と期待する反面『レトロすぎて、好みじやないかも
……』と、不安でもあつた。

しかし、結果は前者となつた。イヴは初めて握ったコントローラーや、ちょっと粗くはあるが可愛らしいグラフィック、そして、ハードの性能を十二分に生かした高いゲーム性に夢中になつてくれた。

もともとこの作品が好きな主人公にとつては、非常に喜ばしい事である。

ところで、なぜ一緒に遊ぶものを探したかというと……。

それは、主人公がイヴと遊びたかったからだ。

誰に頼まれたわけではなく、自主的に、イヴと楽しい時間を過ごすために、主人公はこのゲーム機とソフトを掘り起こしたのだ。

▲1 ここでSE1がフェードアウトし、SE6に切り替わる。

SE6 ゲームのステージクリアBGM

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【ごく小さな音量で流す】

【▲2でストップする】

「主人公と声が重なっているイメージで」

やつたあ」

〈主人公〉

「やつたー！」

かくして主人公とイヴはボスキャラを倒し、クエストは完了した。
二人は大いに盛り上がり、揃って万歳をする。

その姿はまるで、もう何年も親しくしてきた友人のようである。

実際に二人が一緒に過ごすようになったのはここ一ヶ月ほどの間なのだが、この間で、二人はすっかり、お互い気が合う事を実感していた。

自分達であれば、お互い気を遣いすぎる事なく、かといって上下関係を無視する事もない。ごく自然体のまま、楽しく話したり、食事をしたり、遊んだりできる関係を築けるとわかつたのだ。

「上機嫌で興奮気味に。しかし、それでもそこまで普段と声が変わらない」

あー面白かった。やつとクリアできたね。

こういうゲームってやつた事なかつたけど、面白いね。

先生、持つてきてくれてありがとう」

〈主人公〉

「楽しんでいただけて何よりです」

そんな主人公は、この一ヶ月で、イヴについて理解を深めた。たとえば彼女は今、ものすごく喜んでくれていて、興奮している。イヴはこの通り、あまり感情が表に出る方ではない。

しかし、その分、積極的に言葉で感情を伝えてくれる。つまり、イヴの発言は、素直に受け止めるのが正しい。

下手に裏があるのでないかと勘織つたり、深読みしたりしてはいけない。イヴが『楽しい』と言っているのなら楽しいのだし『面白い』と言つたら、それがきっと本音なのである。……きっと。

SE7 オーブンの音

【最初から最後まで流す】

と、そこで『チーン』とオーブン機能の停止音が聞こえた。

ゲームと並行して、イヴが電子レンジでパイを焼いてくれていたのである。

「あーパイ焼けた」

〈主人公〉

「わたしが持つてくるよ。待つて」

「あ、取つてきてくれるの？ ありがとう」

主人公、『待つてました』とばかりに立ち上がる。

先ほどからずっと、これが楽しみだつたのだ。

今日訪問してすぐに『先生、パイ食べない？』と言われた時は驚いたが、もちろん食べたかった。

なんでも、スーパーに売っているパイシートで、簡単にパイが焼けるらしいので、試してみたかったのだという。

SE8　主人公が電子レンジに向かつて歩いて行く足音

【最初から最後まで流す】

SE9 イヴがゲーム機の電源を落とす音

【最初から最後まで流す】

【ごく小さな音量で流す】

【遠くで聞こえる】

▲2 ここでSE4がストップする。

SE10 主人公が電子レンジの扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

主人公、いそいそと電子レンジがあるキッチンの方まで歩いて行き、電子レンジから、焼きたての小さなパイ達を取り出す。

それから、それらを落とさないように、わくわくしながら元の場所まで運ぶ。

その間、ちょっと息を吸つただけでわかつた。

食べる前からわかる。これは、絶対においしい……。

SE11 主人公がイヴのところへ戻る足音

【最初から最後まで流す】

【S E 8 と同じ音】

〈主人公〉

「お持ちしました！」

「【嬉しい】

ありがとう。

【ちよつと得意げに。『主人公はすでに、広末家の事を熟知するほど入り浸っている』とい
う事実が誇らしい】

ふふ。何か先生もう、すっかりうちの人つて感じだね。
食器の場所も覚えちやつてるでしょ。

じゃあ、ゲームもキリいいし、食べよつか

〈主人公〉

「うん！ 食べたい！ すっごい楽しみにしてたの」

そんな主人公を見て、イヴが笑う。

その顔はまるで、子どもを見る母親のようである。

この一ヶ月で、主人公は、己の食い意地が張っている事も、イヴの作るご飯が大好きな事も、すっかりバレてしまつた。

だからもう隠す気はないが、こんな風に微笑まれると恥ずかしい。

最近、イヴと一緒に居ると、とても楽しいのだが、妙に照れてしまう時がある……。

「【すごく嬉しい。主人公の反応が可愛い】

ふふ。そんなに楽しみにしてくれてたんだ。

【質問する。でも主人公はおそらく『両方食べたい』と言うとわかっている】
じゃあ先生。ソーセージ入つての奴とジャム入つての奴、どっちがいい?】

（主人公）

「どっちも食べたい！」

SE12 イヴが食器を並べる音

【最初から最後まで流す】

「【声が笑っている。予想が的中したので】

はいはい。両方ね。どうぞ。

【一呼吸おいてから。子どもと一緒に食事する母親のような感じで】
では、いただきます」

〈主人公〉

「いただきます……」

主人公、早速一口食べて、うつとりと目を閉じる。

想像に違わない、いや、それ以上のおいしさである。

「【パイを一口食べて】

※食べているふりでOKです

むぐむぐむぐ……。

【少し間をあけてから。我ながら、品質に納得して】

うん。おいしく焼けたね】

〈主人公〉

「うん……すっごくおいしいよお……。お店で売ってるやつみたい……」

主人公、うつとりしながら何度もうなずく。

まずはソーセージ入りからいただが、最高すぎる。

お腹の容量が許す限り、いくらでも食べ続けたいクオリティだ。

「とても嬉しい」

先生が手伝ってくれたお陰じやない？

【自分の技術ではなく、パイシートが凄いのだと思つてゐる。

実際に、本当に簡単にパイが焼ける逸品だからである】

後、このパイシート、ほんとすごいんだよね。

安いし、こんなに簡単にパイが焼ける

〈主人公〉

「そうなんだ！ はあ、うまい……」

しかし、ここで主人公、これでは自分の気持ちが伝わっていない事に気づく。

つい食べるのに夢中になりすぎて、相槌が適当になってしまった。これでは『主人公はイヴの腕ではなく、パイシートがすごいと思つてゐる』と受け取られかねない。

今イヴが言つた通り、このパイの製作には、主人公も多少かかわつてゐる。確かに見たところ、そこまで手間はかかつていなかつたようだ。

つまりそれだけ作業を短縮できるこのパイシートはすごい。それはわかつてゐる。

だが、主人公一人だつたら、たとえ同じ材料を与えられても、このパイは焼けないだろう。

なので、補足した。

〈主人公〉

「でもさあ。それは広末さんが普段から料理してて、手慣れてるからだよ。たとえば同じパイシートがあつても、わたしが作つたら、ここまで綺麗に、おいしくは仕上がらないと思う。

だからこれはやつぱり、広末さんの腕があつてのもの！

広末さんはもはや、わたしのママだね。

家庭でこんなにおいしいお菓子が食べられるなんて幸せすぎるよ」

しかし、今度は余計な事まで言つてしまつたようだ。

イヴが不満げに口をとがらせる。

「不満げに。露骨に声のトーンが、可愛く下がる」

あー。また『広末さん』って言つた。

【とても嬉しいが『ママ』扱いでは困ると感じている。

※マークまで、可愛く不満を述べる

学校じやあしようがないけど。『うちではイヴでいい』って言つたじやん。

【一呼吸おいてから】

ていうか、褒めてくれるのは嬉しいけど。

それ。

毎日ご飯とかおやつとか作ってくれる人って意味で『ママみたい』って言つてるなら、
そこは『お嫁さん』と言つてほしい」※

（主人公）

「えっ？ あっ……？」

主人公、動搖のあまり、危うくフォークからパイを落としそうになる。

まさか、そう来られるとは思わなかつた。

だが、言われてみれば、その方がしつくりくる気がする。

だつて、頻繁に相手の家に遊びに行つて、何気ないけれど充実した時間を一緒に過ごし

て。だがしかし『友達』というには、ちょっと違うような気がする関係。
それって確かに、『ママみたい』というよりも……。

「にやにやと。主人公の反応を楽しんでいる。が、割と真剣】
ねえ。お嫁さんにしたい？」

〈主人公〉

「えっと……」

主人公、途端に意識してしまい、返答に窮する。

もちろん、イヴは冗談で言っているのだとわかっている。

だが、それでも困つてしまつたのだ。

もちろん『したい』か『したくない』かの二択でいえば、どう考へても答えは『したい』だ。イヴの家事能力は極めて高いし、何より人柄がいい。イヴのような女性となら、きっと穏やかで幸せな日々が過ごせるだろう。というか、今の主人公がとても幸せである。

だから、たとえばこれが通常の親しい友人であつたら、主人公は即答していた。

『絶対いいお嫁さんになれるよ！』なんてお決まりのフレーズを用いて、太鼓判を押す。

そんな、ありがちな事をしていただろう。

でも、なぜかそれはできなかつた。

それは、たとえばイヴが誰かのお嫁さんになつたら、主人公はすごく淋しくなる気がしたからだ。

イヴにはいつまでもこんな風に、自分にお菓子を焼いてほしい。日々のささやかな樂しみを、自分と共有する人であつてほしい。

身勝手極まりないが、そんな事を思つてしまつたのだ。

……だが、そもそもなぜ、自分は、親しくなつてまだ一ヶ月ほどのイヴに、こんな事を思つてしまつたのだろう。

それは、意外なほどに気が合つて、年齢差を感じないほど盛り上がるからだろうか。イヴの世話焼きで優しい所に何度も助けられたり、正直な言葉で気持ちを伝えてくれる誠実さを尊敬したりしているからだろうか。

いや、それだけではない気がしてきた……。

「あまり間を置かずにすぐ話題を変える。まるで気にしていない感じで。

本音としてはものすごく気になるが、あまりしつこくして、主人公を困らせたくないふふふふふ。冗談。

【パイを一口食べて。食事を再開することで、『これについてはもう追及しないよ』という意思を伝えている】

※食べているふりでOKです
もぐもぐもぐ……。

【少し間をあけてから。

食べ終わってから話す。しれっと、普通に。

今気づいたような雰囲気で言っているが、前々からそう思っていた
あ、でも、先生をお嫁さんにしたい人はいるかも」

〈主人公〉

「ふえっ!?

だがここで、イヴはあっさりと話題を変えてきた。

しかも、その矛先が主人公に向いた。

なので主人公はますます驚き、ますますなんと答えればいいかわからなくなる。
すっかり、イヴに翻弄されている。

〈主人公〉

「いやいやいや、そんな事は……」

〔しれっと根拠を述べる〕

だつて先生、私のご飯、いつもおいしげって食べてくれるし。
私が安心して過ごせるように、色々考えてくれるし。

〔イヴ的には、これが重要。〕

たとえば、トラック03『03・公認の関係』での、カフェラテや柔軟剤の件がとても嬉しかった

私の好きなもの事は、全部覚えててくれる。

〔さらっと言う〕

私、先生のそういう所、大好き」

〈主人公〉

「えつ。あつ、あつ……」

頭に、先ほどの自分自身の主張が蘇る。

“イヴの発言は、素直に受け止めるのが正しい。

下手に裏があるのでないかと勘織つたり、深読みしたりしてはいけない。

イヴが『楽しい』と言っているのなら楽しいのだし『面白い』と言つたら、それがきっ

と本音なのである。』

仮に、この考えが正しいとして。

……じゃあ、イヴが『一緒に居て楽しい』『大好き』という事は……。

【ごく自然にたたみかける。

主観ではなく、客観的にいいと思つてるので照れない。

まるで友達の好きな人あるいは芸能人を、冷静にほめているような感じで。たとえばテレビの人気歌手の歌を聞いて『この人、いい声だよね』と、誰が聞いても当たり前の事を言つているようなイメージで】
でもつて、声も好き。いい声だよね】

仮説を立てる前に、さらに甘い言葉が飛んでくる。

〈主人公〉

「えっ、いや、それほどでも……」

——いい声は、広末さんの方じやん！

なんて返す前に、さらに次がくる。

「主人公の反応を楽しみつつ、素直な気持ちを述べる。

やはり、友達の好きな人や芸能人を、冷静にほめているような感じで。

客観的に、今テレビに映っている芸能人の良い所を述べているようなイメージで】

それから、手が綺麗】

〈主人公〉

「ど、どうもありがとう……」

さらに、これだけでは済まず……。

「声が弾んでいる。

ここから『客観的にもよいと思うし、主観的にもとても良い』という感じになつてくる。

主人公を正面から見つめて、照れなく言っているイメージで】

顔もいい】

（主人公）

「いやいやいや！ その辺にいる顔だし！」

主人公、たまらなくなつて、顔の前でぶんぶんと手を振る。
それから思う。

なんでこの子は、そういう事を照れなく言うんだろう！？

だめだ！ このままじや、一方的にめちやくちやにされる！

広末さんつてば、人をからかって遊ぶのはやめてほしい。

いや、人をからかうような子じやないっていうのは、わかつてるけど……。

と。

だつて、まさか、こんなにべた褒めされるとは思わなかつたのだ。
おかげで主人公の顔は、今、わかりやすすぎるほどに真つ赤だ。

思わず手で顔を隠すように覆つたが、これもいけない。

これでは『私は今照れています』とアピールしているようなものではないか。
しかも、イヴはそんな主人公の顔を、にやにやと覗き込んでくる。

「照れなく、主人公の顔をじっと見ながら言つて いるイメージで。

『へえ？ そう？ 本当にその辺に居る顔かな？ よく見せて確認させて？』 という感じで

その辺にいる顔？ そう？』

〈主人公〉

「そう！」

主人公、思う。

ほんとにその辺に居る顔なんだから、そんなにまじまじと見ないでほしい。

ていうか、いい声やいい顔してるのは広末さんなんだから、いい声・顔を鑑賞したいなら、自分の事を見たり聞いたりしててほしいんだけど！

と。

だが、これによつて、新たな事実に気づく。

先ほど主人公は『イヴの事をお嫁さんしたいか』と聞かれて、答えられなかつた。

それは『誰かのお嫁さんになつてしまつたら淋しい』と思つてしまつたからだ。でも『イヴの容姿や声は優れている。少なくとも、自分はそう思つてはいる』という事なら、別に言つてもいいのではないか。

……なのになぜ、主人公は、今それを言えないのだろうか。
どうしてイヴのように、素直に思つてている事を言えなくなつてしているのだろうか。

「【にやにやと。主人公の反応が可愛くて楽しい】

じやあ、この辺にいたのが先生でよかつたなあ」

〈主人公〉

「あ、あ、あ……」

「【主人公が可愛くてたまらない】

ふふふふふ。

〔少し間をあけてから。またも、あっさり話題を変える〕
あ。ジャムの方切れたよ。食べて食べて」

〈主人公〉

「あ、う、うん……」

しかし、またもここで話題が切り換えられてしまつた。
そのせいで結論を出せなかつた主人公の混乱は、深まるばかりだ。
せつからく切り上げてくれた話題を、蒸し返してしまつ。

〈主人公〉

「で、でも、ほんとにモテないから。

何かいつも『思つてたのと違う』って言われるし」

主人公、とうとう、かねてからのコンプレックスまで口にしてしまう。
頭の中はもうめちゃくちゃだ。考えが、まるでまとまらない。

ああ。な、なんでわたしは、こんな言わなくともいい事を言つているんだ……。
それなりに生きてきた大人なんだから。

『モテない』とか主張した所で、誰も得しない事位、わかってるのに。
事実はどうあれ、せつからく褒めてくれてるんだから。
ここで謙遜しても、相手を困らせるだけだつて知つてゐるのに。

……なのに、なんでこんな事してるんだろう。

最近年下の広末さんと一緒にいすぎて、自分まで若くなつた気持ちになつて、精神的に幼くなつちやつてるのかな。

それとも、ほんとにペース乱され過ぎて、普段ならしないような事しちやつてるのかな。
それとも……。

「きよとんとして。自然に復唱する。

個人的には反論したいが、主人公の主張を受け入れている感じで】

ふーん。モテないの？

【だが、こちらに関しては『なぜそう言われるのかわからない』と思つていて】

いつも『思つてたのと違う』って言われる？

【きよとんとして。怒つているのではなく『本当に謎だ』という感じで】

何でそう思うんだろう。

【少し間をあけてから。

温かみのある声でからかう。

思ついた『思つてたのと違う』要素が、これだつた】

ああ。先生つてパツと見大人の女なのに、思つたよりドジだから？】

（主人公）

「ひ、ひどい！」

〔温かみのある声で続ける〕

でも私、ちょっとボーッとしてたり、困って『えーん』つてなつたりしてる先生も好きだよ。

〔少し間をあけてから。〕

温かみのある声でくすくす笑って。トラック01『01・目を覚ましたら、ひざまくら』での出来事を思い出して

まあ、危ないから、外で寝ちゃうのはもうダメだけどね

（主人公）

「…………」

主人公、真っ赤になりつつ、熱い頬からそつと手をよける。

もう隠しても無駄だ。今自分が照れていて、イヴの言葉をたまらなく嬉しく感じている事は、イヴにはもうバレバレだ。

だつたらもう、開き直つてしまえ。

思う存分見るがいい、この恥ずかしがりながらも、喜びを全然隠しきれていないわたしの事を！

と、思つていると……。

「少し間をあけてから。

『しかし、思つてたのと違う』のは、決して悪い事ばかりではないだろうと考えている
でも私、そういう先生だつたから言えたんだと思う。

【声のトーンが下がる。トラック02『02・真昼の逃避行』での変質者騒ぎを思い出して】
あの時……変な人がついて来た時。

誰かに言つても、信じてもらえないかも知れないって思つたから】

〈主人公〉

「えつ？」

ここで、話が意外な方向へ転んだ。

それは聞き捨てならない。主人公、これまでの葛藤は忘れ、先ほどとは別の意味で、

むきになつてしまふ。

〈主人公〉

「いやいや、信じるよ。信じるでしようよ。

生徒つていうか、助けを求めてる人の言う事なんだから」

だが、またもイヴは同意しかねるようだ。

二人は相當に気が合うから一緒に居るはずなのだが、今日はなぜか、とことん意見が食い違つてゐる。

「【穏やかに同意しかねる意思を示す。

『そうかな。必ずしもそうとは限らないよ』といふ感じで】

そうかな。

『気のせい』とか『気にしそぎ』って言われて終わりかもつて、ちょっと怖かつたんだよ。
【声はいつもと変わらない。

だが、先ほどの主人公の『モテない』発言に引っ張られて、つい自分もコンプレックスを吐露してしまう。

イヴはこれまで不愛想な子だと勘違いされる事が多く、教師と親しくなつた経験はない。

それどころか、仲良く話した事もほとんどない。

当然、自分の人格を受け入れてもらつたと感じる事もなかつた

だつて私、あんまり先生に好かれるタイプじやないから。

【少し声のトーンが下がる。『そう言わ_れてたら』は『氣のせい、あるいは氣にしすぎと言わ_れていたら』という意味】

もし、そう言わ_れてたら。私どうしてたんだろうな……】

〈主人公〉

「言わ_れないよ。絶対に言わ_れない」

主人公、強めに否定する。

らしくもなく、少し語気が荒くなつていると自覚していた。

だが仮に、イヴが『先生に好かれるタイプではない』のなら、自分はより一層、イヴの味方でいるべきだと思つた。

こんな時だけ先生ぶるのはおかしいかもしれないが……とにかくそうしたかったのだ。

そんな主人公を見て、イヴが目を細める。

その時、なんだか泣きそうな顔をしているように思えたが、氣のせいだろうか？

「嬉しくなり、声が少し明るくなる。

主人公なら、絶対にそう言つてくれると確信していた】

うん。『先生ならそう言う』『誰かが困つたら、きっと助けてくれる人だ』って。今はわかるんだけどね。

あの時……もう一ヶ月位前か。

その頃は私『もしかしたら先生に嫌われるのかも』って思つてたから

〈主人公〉

「えっ？ そうなの？」

主人公、驚いて身を乗り出す。

全く身に覚えがない。

嫌うも何も。約一か月前のあの日まで、主人公とイヴには全く接点などなかつた。

仮にイヴがものすごく嫌な人間だつたとしても、主人公には、それを知るきっかけすらなかつたのである。

主人公にとつてイヴは、『生徒の一人としてももちろん把握しておくが、きっと縁がないままに卒業していくだろう生徒』だった。

だからイヴにとつての主人公も、似たようなものだろうと思つていたが……過去の自分は、一体どんな悪事したのだろうか。
いや、もしかすると……。

〔少しむくれて。可愛く怒る〕

そうだよ。言つたじやん。初めて話した時。

『私は先生がここに住んでる事知つてた』つて。

『おーい』は、手を振るしぐさをしながら話しているイメージで

ロビーで見つけて、手え振つて『おーい』つてした事もあるんだよ。

【当時は『無視されたのではないか』と不安だつた。

しかし、今では主人公の人柄を知つてるので『単純に気づいていなかつたのではない
か』と思つてゐる。なので、イヴの推測でしかない『無視』ではなく、事実の方の『無反
応』という言葉を使う】

でも、先生全然無反応だつたし

〔主人公〕

「えつ！
嘘！」

主人公、自分のぼんやり具合にうなだれる。

口では『嘘だろう』と言つたが、実際には『やはりそちらの線だつたか』と感じていた。先ほど指摘された通り、主人公は普段、あまりにもボーッとしている。あらかたその時も考え方夢中になつて、近くにイヴがいる事に気づかないまま通過してしまつたのだろう。

恐ろしい話だが、このような指摘を受けたのは初めてではない。

信じられないかもしねないが、主人公はいつもそうなのだ。

世の中にはそういう、近くに知り合いがいても、とことん気づかぬタイプの人間がいるのだ。

だが、それが理解されがたい事も重々承知している。

これでは確かに『嫌われている』『無視されている』と受け止められても仕方ないとthought。

「先ほどはむくれたような態度を取つたが、実際は別に怒つていない。

当時は確かにショックだつたが、主人公の人柄を知つた今なら『本当に気づいていなかつたのだろう』とわかるからである

それでも私、先生がいい人なんだろうつて事は知つてた。

直接話した事はなかつたけど。友達から『先生に話聞いてもらつた』とか『早退する時

送つてもらつた』とか、聞いてたから。

【少し間をあけてから。少し声のトーンが下がる。

【当時の自分の勇気のなさを思い出して】

でも、なんか話しかけられなくて……。

【声のトーンが戻る。トラック01という、楽しい出来事を思い出しているので】

だから、マンションのラウンジに先生が居た時『ちょっとチャンスかも』って思つたんだ。

【思い出し笑いして】

ふふ。そしたら先生、寝てたんだけど

〈主人公〉

「そうだつたんだ……」

主人公、ひとまず相槌を打つ。

反省すべき点が多すぎて、まずイヴに気づかなかつた件を詫びればいいのか、ラウンジで寝ていた件を詫びればいいのかわからなくなつたが……この話にはまだ続きがありそうだつた。

「そうだよ？あの時、本当はすごい勇気出したんだから。

【ふと思い出したように。これについて、本当に今思い出した】

そうだ。先生もしかしたら知らないかもだから言うね。

うちの学校の子つて、実はこのマンションにもう一人いるんだよ】

〈主人公〉

「え？ そうなの？」

と、ここで、さらなる新情報が入った。

当然、主人公は知らなかつた。

わたし、普段、どれだけばんやりしてるんだろう……。

と、そそこのショックを受ける。

「『『だろうと思つた』という感じで】

やつぱり知らなかつたか】

〈主人公〉

「ごめん。知らなかつた。ほんとにいつもボーッと歩いてるもんで……。
どんな子？」

「少し考え方こんでから話す。実際はイヴも、相手の事をよく知らない。
『ペコつてする』というのは『会釈する』という意味」

私も会つたらペコつてする位で、住んでる階とかはわかんないけど……。

【先輩】というのは『自分から見て先輩』という意味】

多分、先輩。背えちつちやくて、肩まで位の髪の、可愛い感じの人】

〈主人公〉

「むむ……何人か候補がいるな」

主人公、素直に非を認めて教えを乞うたが、候補を絞りこむ事はできなかつた。
数人ほど、思い当たる女子生徒がいる。

なので、

……とりあえず、今度それらしい子を見かけたら挨拶をしよう……。

と、思つて いると、イヴからもつともな指摘が入つた。

「会つたらきっとわかると思うよ。その時は声かけてあげてね。
もしかしたら私みたいに、いらぬ心配をしてるかもしれないから」

〈主人公〉

「……そうだね。承知しました。必ずそのようにします」

主人公が深々と頭を下げると、イヴが楽しげに笑つた。
それから『この話は終わりです』と合図をする。

【素直に従う主人公が可愛い】

ふふ。うん。約束だよ。

【主人公がかしこまつた口調になつたので、イヴにもそれがうつる
私からは以上です】

〈主人公〉

「わかりました。じゃあ……あのね？」

なので主人公は、話題が切り替わるこのタイミングで、さらにしこまり、イヴの顔を覗き込んだ。

今の自分に反省点が多いのは承知だ。

だけど、ひとまずそれは置いておいて……。

自分からも、イヴに伝えたい事がある。

そう思ったのだ。

「優しく続きを促す。

しかし、主人公が何を言おうとしているのかは検討がつかない】
んー？】

〈主人公〉

「わたしも、ここであなたに伝えたい事がありまして」

「きよとんとして。『伝えたいたい事』について、皆目見当がつかない】

何、改まつて。先生も私に言つてなかつた事があるの？」

〈主人公〉

「うん」

「優しくからかうように。しかし、内心では少し不安。

こうは言いつつも『おそらく食べ物の件ではない』と思つて

何。もしかして、実は苦手だけど無理して食べるおかずとかあつた?」

頷くと、イヴがからかうように覗き込み返してきた。

それは極めて普段通りに見えるが、どこか不安そうにも見える。

もしかすると、イヴにはそういうところがあるのかもしれない。

本当は不安なのに、相手に気を遣うあまり、うまく伝えられない事があるのかもしれない。

思えば、カフェで会つた日もそうだった。

先ほどイヴは『あの日主人公が助けてくれなかつたら、詰んでいた』と言つていたが
……。

もしかすると、『詰む』とまではいかずとも、周囲にうまく助けを求められず、途方に暮れてしまつた事が、過去にはあつたのかもしれない。

だつたら主人公は、今後イヴがそうならないように助けたいと思つた。
それは、『自分がイヴの先生だから』ではなくて……。

〈主人公〉

「あのね」

「うん」

〈主人公〉

「イヴちゃんは可愛いね」

「虚を突かれる。すごく嬉しくて、戸惑う
えつ……」

あ。なんかちょっと説明が足りない気がするけど、本音だからいいか。

いいや。おいおい補足しよう。

漏れ出た言葉は、ずいぶん省略があつたものの、紛れもなく本心だつた。

それは一見脈絡のない発言だが、主人公の中ではちゃんとあつた。

だつて主人公は、イヴを可愛いと思つてゐる。

好ましく思つてゐるし、いじらしいと感じてゐる。

だから今後、彼女が困つてしまふ事がないように。その人柄を知る者として、助けたいと思つてゐる。

これをものすごく短く言うと『可愛いね』という言葉になつたのだ。

（主人公）

「それから、優しいよね。

初めて話した時から、いい子だなあつて思つてた。

あの時は『自然に人に親切にできる子なのかな』つてと思つてたけど……。

本当は勇気出してくれてたんだね。

酔つ払つてた、バカなわたしのためにありがとう』

主人公としては、普段イヴがそうしてゐるよう、単純な事実の羅列として、イヴを評価したつもりだつた。

しかし、イヴは途端に照れてしまつたようだ。

いつもはこちらを照れさせる事を平然と言うくせに、今はもごもごしてゐる。

「途端に照れてしまう

あ……。

【『別に』が途切れで『べ、つに』になる】

べ、つに。大した事じやないよ。

【この『ガーデン逢瀬』に住んでいる、もう一人の逢瀬学園の生徒について話している。
しかし相手が『先輩』という確証はない。なので、『先輩?』と疑問形になる】

先輩? の事は、前から言おうと思つてたし。

【変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配する】は『変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配するに決まっているでしょう?』の省略】

ラウンジでの事もそう。

変な所で寝てる人が居たら、誰でも心配する。

【少し間をあけてから。

もごもごする。とても恥ずかしいので】

別に優しいとかじや、ないよ】

そんなイヴは、ますます可愛かつた。

今は主人公が『誰でも心配する? そう? じゃあ、あの時心配してくれたのがイヴちゃ

んでよかつたなあ』と言いたい気分だ。

だつて、あの時イヴが主人公を見つけてくれなかつたら、今の二人の関係はなかつた。だから『ラウンジ』という『この辺』に居たのがイヴでよかつたなあと、主人公は思うのだ。

〈主人公〉

「心配してくれただけじゃないよね。

わたしが起きるまで、膝枕して待つてくれたの、覚えてるよ」

「ますます照れて、もじもじしてしまう

それは……先生の日頃の行いがいいからだつて。

先生がおかしな人じやないつてわかつてたから。無理に起こさないで。起きるまで待つてようつて思つたの。

〔少し間をあけてから。とても恥ずかしい〕

あのね。そんなに褒めたつて、私が嬉しいだけで、何も出ないよ。

〔恥ずかしくなつてきて、思わずからかってしまう〕

それとも何？ やっぱり嫁にしたくなつた？」

〈主人公〉

「うん。したい」

イヴが反撃してきたが、主人公はもうひるまなかつた。
驚くほど素直な言葉が出る。

もはや、どう受け止められても構わない。自分が今思つて いる事を伝えたい。
褒められ慣れていないのか、困つて いるイヴはとても可愛かつたし、たとえば『お嫁さん』を『ずっと一緒に居たいと思う人』と定義するのであれば、自分にとつてそれは、まさにイヴだらうと思つたのだ。

「嬉しくて、声が出ない。」

先ほどまで饒舌だつたのに、いざ攻め込まれると、上手く受け答えができない】
えつ……」

〈主人公〉

「お嫁さんにしたい。イヴちゃんは素敵な人だから。
イヴちゃんみたいな人がお嫁さんだつたら、きっと幸せだらうなつて思う」

「少し間をあけてから。ものすごく嬉しい。」

あからさまに照れて、しどろもどろになってしまいます。

どういう意味であれ『お嫁さんにしたい』と言われた事が、とにかく嬉しい
あ。し、したいんだ。

【嬉しくてたまらない】

そつ、か……。

【主人公の言葉が嬉しくて、語彙力が大幅にダウンしている。

その結果、同じ言葉を繰り返してしまう】

そつか……】

〈主人公〉

「そうです」

主人公が大きく頷いて微笑むと、イヴが泣きそうに目を潤ませた。
よかったです。少なくとも、不快にさせてはいないようだ。

【嬉しくて泣きそう】

ありがとう……】

7秒ほど沈黙。

二人、そのまま、もじもじと顔を見合わせる。

なんだか、思つた以上にいい雰囲気だ。

だから主人公は思わずイヴの頭を撫でたり、抱きしめたくなつたりしたが……『果してそうしてよいものだろうか』という気持ちが、その手を止めた。

一人暮らしで心配だからとはいえ、生徒の家に友達のように入り浸つておいて、今更な氣もするが……。

たとえ同性で、信頼関係があつても、教師と生徒にはどこまで許されるのかわからない。だが、主人公は思う。

じやあ、逆に。

仮にわたしとイヴちゃんには、信頼関係があるとして。

わたしは自分達が教師と生徒じやないなら、今、頭なでなでしたり、ハグしたり、してたのかな。

なんで、したいと思つたのかな。

それは……。

と、そこで、イヴが何かに気づいたように、テーブルの上を見た。視線の先を追うと、主人公のスマホ画面が点灯している。メッセージか何かが届いたようだ。

「恥ずかしくなるあまり、主人公のスマホの通知に救いを求める】

あ！ 先生。何か通知来てるよ？

見たら？

明日早く来てつて言われてるんでしょ。それ関係かもよ」

〈主人公〉

「あ、う、うん！」

主人公、今、ひそかに出た結論にどきまぎしつつも、イヴに従う。

時刻はもう二十一時近く、おまけに今日は日曜日だ。

明日、登校や出勤がある人なら、そろそろ明日に備える時間のような気もするが、一体誰だろう。

SE13 主人がスマホを手に取る音

【最初から最後まで流す】

そう思いながら主人公はスマホを手に取り、一度消灯してしまったそれを、再度点灯させる。

〈主人公〉

「……あ、学校からみたい」

するとそこには『逢瀬学園』という、教師間のグループチャット名が表示されていた。
それは、たまにある飲み会や、その他の連絡事項の時位しか使わないもののはずなのだが……。

「【きよとんとして。日曜日のこんな遅い時間に連絡が来ることが不思議。この一か月主人公と沢山一緒に過ごしたが、このような事はなかった】
学校から？」

〈主人公〉

「うん。ちょっと見ちゃうね」

あーもう、こんな時になんなんだ。
なんか大した事じやない気がする。大した事じやない気がするぞ。
そう。今は『こんな時』。こんな時なのに。
今すごい、大事な時なのに……！

主人公、水を差されたような気分でムスつとしたままスワイプし、内容を確認する。
だが、そこに書かれていたのは——……。

〈主人公〉

「……！」

主人公、目を見開き、息をのむ。

それは、とても喜ばしい事だつた。

主人公が少しでも早く『そうなつてほしい』と、強く願つていた事だつた。

「優しく。主人公が固まつてゐるので、少し心配になつて」
先生？」

だから一刻も早く『その件』についてイヴに伝えるべきだ。それは間違いない。

「なんかあつた？」

——だがそうした時、主人公とイヴは、新たな問題に直面するだろう。
この一ヶ月の間、二人は親しくなりすぎた。

いつしか当たり前のようと一緒に過ごして、それが今後もずっと続くような気がしてい
た。

そんな奇妙な間柄に、二人はあえて名前を付けずに暮らしていたが……。

『その件』を伝える事は『二人はあくまで、教師と生徒である』と再確認させる。

そうなつた時、自分達はどうなるのだろう？

主人公は今、それが、とても怖くなつてしまつていた。

「先生……？」

ここでフェードアウトして終了。